

プロローグ

「強さ」だけが人間を 独立した存在に導く

若いときは将来が不安なものだ。自分の力を実社会で試したことがない。だからそれが実社会でどれくらい通用するのかわからない。何でもできそうな気もするし、何もできないような気もする。

大学までは親が敷いたレールの上を走ればそれなりに安定した生活が送れた。もちろん、レールの上に乗って、何も考えずにただただ走ってきたわけではない、ということはある。自分なりに悩み、様々な逆境を乗り越えて走ってきたのだと思う。

ほとんどの人は大学で成人を迎える。しかし、残念ながらキャンパス生活の中で成人としての自覚と責任を経験する場面はほとんどない。今の日本の大学はテーマすらないパークのようだ、といえ過ぎだろうか。総じて言えば、教員にも学生にも緊張感というものが見あたらない。豊かだからだろうか。平和だからだろうか。そもそも今の時代、そうした緊張感だとか、ハングリー精神を求めること自体、時代遅れなのだろうか。

今の学生は至って真面目だ。反抗しない。従順。だが、同時に自己主張も滅多にしない。別に媚びているわけでもない。平和主義なのだろう。対立もしたがらない。本気になってぶつからなくても十分楽しく生きていけるようだ。友達がいれば、ゆるーく付き合っていけばよく、友達がいなくても、一人で楽しめるものなんて今の日本にはいくらでもある。ケータイやソーシャルネットワークを使いこなすと人間関係も豊かになったように感じる。

しかし、大学を卒業すると状況は一変する。社会人になった途端、社会は大学とはまったく異なるゲームのルールの下で運用されていることに段々と気づくようになる。大学では、権威は適当に避けて通ればよかった。お金を、自分から組織（大学）に払う立場だからだ。

しかし、会社に入るとお金をもらう立場になる。〳〵会社という消費者〳〵に対し、自分が供給者としてサービスを提供しなければならぬ。特に今のような景気情勢だと、自分の〳〵会社という消費者〳〵に見放されると、永遠に居場所を失ってしまうのではないかと不安を感じることもあるだろう。

労働力にも賞味期限がある。自分という商品を売るということは、時間が経つにつれてますます難しくなっていく。この会社から見放されるかもしれない、という不安感に敏感になっていく自分に気づく。

そこで多くの人は、自分から権威（上司など）を見つけ出し、その権威に対し、従順な自分を自ら演じて、その従順さを権威にプレゼントし続けることに一生懸命になる。きちんとした上司であれば、そうした軟弱で必要以上に従順な羊を叱るだろうが、能力のない、あるいは権威の行使に味をしめた上司となると、巧妙に虚像としての権威を膨らませ、羊の脳裏の深いところに自分を刻もうとする。

このとき、〳〵羊社員〳〵は、「強さ」だけが人間を独立した存在に導く、ということにまだ

気づいていない。だから、自らボスを作り出し、従い、そして依存することで、安定した自分の居場所を確保しようとしてしまう。大学時代の野心や志はいつのまにか日常から姿を消す。目の前にある仕事、そして社会から見れば限りなく小さな人間組織の中の自分の処世に、すべての心血を注いでいる自分を発見することになる。

夢は小学校のときが一番野心的であり、年齢を重ねていくごとに段々と小さくなっていき、いつの間にか夢を見ることすらしなくなる。それは、大人になっていくというところが、終わりのなき挫折を経験することであり、自分の力の弱さ、社会という壁の厚さを体験することもあるからだろう。そのうち、翼は折れ、飛ぶことを諦める。そしていずれは翼があったことすら忘れるだろう。

殻を自ら破るところか、殻が破れることへの不安や恐怖の中で、日々をびくびくしながら過ごすのが精一杯だろう。新しい世界に対する憧れより、適応力の欠けている自分が、新しい世界に飛び込むことへの恐怖感が先行する。これを大人になったというべきか、現実的になったというべきか。

勤続年数を重ねれば重ねるほど萎縮していく自分、日常に妥協していく自分。どのようにして挑戦し成長していくか、というよりは、どのようにして今のポジションを失わないようにするのか、という、いつの間にか守りに入っている自分がある。さらに、結婚し、子どもができて、ローンを組むようになると、もはやこの自己萎縮のスパイラルから抜け出すことはできなくなる。

こうした事態を避けるためにも、ゼミ生たちには強くなってほしいと思う。

その強さとは、

- ・ お金とか名誉とか外面的な意味での強さではなく、内面的な強さだ。
- ・ 自分自身の尊厳に対する最大限のリスクペクトを払える強さだ。
- ・ どんなに辛い逆境でもいつでも受けて立つ気概を持てる強さだ。
- ・ 自身のすべての行動に対し結果に対する全責任を自分で負う決意の持てる強さだ。
- ・ 何事にも縛られない何事にもとらわれない、そして物事をありのままの状態を受け入れられる大きくそして動じない強さだ。
- ・ 自分がこの世に存在する間に起きるすべての出会いや出来事は奇跡であると信じ、そ

れが持つ意味を省察できる強さだ。

・他者の存在に対する最大限の尊敬を払うとともに他者の感性、思考、行動に対する深い理解のための努力をする。そして他者の不完全性に対し海のような包容力を持てる強さだ。

・愛する人のためなら世の中を敵に回せる強さだ。

・生きるすべての瞬間を人生の最後の瞬間になるかもしれないという緊張感を持ち、その瞬間に対するすべての心血を注ぐことのできる、そしてその緊張感や集中力を死ぬその最後の瞬間まで持続できる強さだ。

これらの強さを持った存在として育てていくために、私は毎週教室に向かうのだ。